第二言語としての日本語の授受動詞習得 ＜研究構想＞

尹　喜貞

1. はじめに

我々は日常生活で毎日のように他の人と物・恩恵の授受行為を行い、日常生活で授受動詞を使う場面が多い。しかし、日本語を母語としない学習者にとって日本語の授受動詞の使い分けは容易ではない。ややもすれば、話し手の本来の意図とは違う意味となり、日常生活での円滑なコミュニケーションに支障を来たしてしまう文法項目である。では、日本語学習者はどのように授受動詞を習得するだろうか、また、習得困難点の要因は何に起因するだろうか。それを明らかにすることは、今後、日本語教育現場で教授法や教材作成などを工夫するとき、よい手がかりとなる点から有意義であると考えられる。そこで、本研究では、日本語学習者を対象に、文構造のレベルの異なる授受本動詞と授受補助動詞の習得を授受方向別に明らかにすることを試みる。また、授受動詞の習得過程は学習者の学習環境及び、母語(L1)を問わない普遍的なのかどうかを検討したい。

2. 先行研究

2.1 授受動詞における視点と習得との関係

物の授受方向を表す日本語の授受本動詞(あげる・くれる・もらう)と恩恵の授受方向を表す授受補助動詞(てあげる・てくれる・てもらう)は、両方とも同じことがらに対して、話者の主語の立て方と視点(共感度：empathy)の位置づけによって対立している。このような日本語の 3 項対立の授受動詞の習得について、奥津(1984)と沼田(1999)は、上野他(1978)の日本人の幼児期の授受動詞習得の実験的調査結果を基に授受動詞と視点の習得の関係を見出している。

幼児の授受動詞の習得順序(上野他 1978)：
(て)あげる＞(て)くれる＞(て)もらう

授受動詞の習得における視点の序列(沼田 1999)：
与え手＞受け手
内＞外

つまり、奥津(1984)と沼田(1999)は、上野他(1978)で幼児が「(て)あげる」「(て)くれる」の方を「(て)もらう」より早く習得するという結果から、授受動詞における視点は主語が与え手のほうが受け手よりおかれやすいと述べている。さらに、沼田は、「(て)あげる」の方が「(て)くれる」より早く習得されることから、視点は主語が「内」のほうが「外」よりおかれやすいという仮説を立てている(ここで、「内」とはいわゆる、身内の人であり、「外」とは、身内以外の人である)。

それでは、この仮説は日本語を第二言語として学習している日本語学習者の場合にも当てはまるのだろうか。また、それは、学習者の L1 や学習環境に普遍的なのかどうか検討の必要がある。

2.2 授受動詞文の内・外的主述関係

宮地(1965)は授受補助動詞文の分析に、話者の主語の立て方と視点という二分析要素のほかに、内的主述関係と外的主述関係を加えて説明している。

・授受方向(A→B)

S
◎　→　(書いてやる)
△

S
△　→　◎(書いてくれる)

S
△　→　◎(書いてもらう)

S：主語、◎：話者の立ち側、△：「書く」の主者

例えば、「書いてやる」と「書いてくれる」の文

は、両方の「文の主語」と「書く」の主者は、Aである。しかし、「書いてもらう」の文の外的主語 Aと内的主語 B(B が書く)と異なっている。それでは、日本語学習者の授受動詞習得は文構造の内・外的主述関係に影響されるだろうか。日本語の授受補助動詞は、語彙レベルの授受本動詞が文法化された統語レベルのものであり、それぞれの習得困難の難易度は異なると推測される。

本研究では、今回に得られた分析結果から授受動詞構文の内・外的主述関係が授受動詞の習得に及ぼす影響を検討したい。

2.3 日本語学習者の授受動詞習得研究

これまでの日本語学習者を対象とする授受動詞習得では、表1に見られるように、授受本動詞と授受補助動詞の習得順序は異なるだけではなく、それぞれの習得順序も一致していない。また、授受本動詞の場合、「もらう」の習得が「くれる」より早いという順序を違反するものは見られないものの、「あげる」の習得順序は研究によって異なる。一方、授受補助動詞の場合は、「てあげる」を含めて習得順序を見出してものは少なく、「てくれる」と「てもらう」の習得順序が異なっている。これらについて、尹(2004b)は、調査内容(授受行為の参加者に話者が参加している場面かどうか)、分析方法、L1、学習環境などの様々な影響の可能性を指摘している。それは、今後、授受動詞の習得を解明するための課題が多いことを示すことでもあるだろう。

また、三つの授受動詞の習得順序を明らかにすることも重要ではあるが、実際に、話者が授受行為の参加する場面において、話者が物・恩恵の与え手の場合、「(て)あげる」を、受け手の場合は「(て)くれる」もしくは「(て)もらう」を使う。そこで、授受方向別に学習者の授受動詞使用の困難点と、二つの授受動詞(てくれる・てもらう)の使用が認められる場面で日本語話者と日本語学習者の選択傾向を調査することも、今後、日本語の教育現場へ有益な手がかりを提供すると考えられる。

3. 本研究の目的と研究の流れ

本研究では、日本語学習者の授受動詞の習得メカニズムを解明することを試みる。そのために、文構造レベルの異なる授受本動詞と授受補助動詞それぞれの習得状況を授受方向別に明らかにする。また、それぞれの習得において、学習者の要因の L1(観点

表1　授受動詞の習得順序

先行研究	被験者の L1	調査資料	結果	
			授受本動詞	授受補助動詞
大塚(1995)	英語・中国語 韓国語など(JSL)	発話	あげる＞もらう＞くれる	てあげる＞てもらう＞てくれる
坂本・岡田(1996)	英語・中国語・ ベトナムなど (JSL)	空欄形式	あげる＞もらう＞くれる	てあげる＞てもらう＞てくれる
岡田 (1996、1997)	英語・中国語・ ベトナムなど (JSL)	作文	あげる＞もらう＞くれる	てあげる＞てもらう＞てくれる
田中(1997)	主に英語(JFL・ JSL)	文産出		てくれる＞てもらう
田中(1999)	英語・韓国語・ 中国語(JSL)	発話		てくれる＞てもらう
韓(2003)	英語・韓国語・ 中国語(JFL)	空欄形式	韓国語話者と英語話者： もらう＞あげる＞くれる 中国語話者： もらう＞くれる＞あげる	
稲熊(2004)	韓国語(JFL)	多岐選択	くれる＝もらう	てくれる＞てもらう
尹(2004a)	韓国語(JFL)	文産出	もらう＞くれる	

1)と学習環境(観点 2)に着目し、次のような研究課題を立てて分析を進める。

【観点 1】L1 の影響

研究課題 1-1：物・恩恵の授受方向による授受動詞の正用率は、日本語能力別に L1 を問わず同じであるか。

研究課題 1-2：物・恩恵の授受方向が「話者←他者」の場合、「(て)くれる」「(て)もらう」の使用比率は日本語能力別に L1 を問わず同じであるか。

研究課題 1-3：授受動詞習得において主な誤用の要因及び誤用型は日本語能力別に L1 を問わず同じであるか。

【観点 2】学習環境の影響

研究課題 2-1：物・恩恵の授受方向による授受動詞の正用率は、日本語能力別に学習環境を問わず同じであるか。

研究課題 2-2：物・恩恵の授受方向が「話者←他者」の場合、「(て)くれる」「(て)もらう」の使用比率は日本語能力別に学習環境を問わず同じであるか。

研究課題 2-3：授受動詞習得において主な誤用の要因及び誤用型は日本語能力別に学習環境を問わず同じであるか。

4. 調査の概要

4.1 対象者

調査対象者は、韓国の大学で日本語を学習している日本語学習者 158 名(KL)と、日本の日本語学校の韓国語話者 60 名(KL)と中国語話者 42 名(CL)である。レベル分けは SPOT(Simple Performance-Oriented Test、versionD、E) の 60 点満点中 48 点以上を上位、30 点～47 点を下位とした。

表 1　対象者の内訳

	KL		CL
Level	JFL	JSL	JSL
上位	84	40	11
下位	74	20	32

JFL：Japanese as a Foreign Language
JSL：Japanese as a Second Language

4.2 調査方法

4.2.1 質問紙

本研究では、絵をみて授受動詞文を作る文産出テストを用いた。問題の構成は、話し手が物・恩恵の与え手の場合(「話者→他者」)の 4 題ずつと話し手が物・恩恵の受け手の場合(「他者→話者」)の 4 題ずつ、全 16 題である。また、被験者の問題の理解をはかるために，問題の説明に韓国語訳をつけた。

4.2.2 分析方法

正誤判断に関しては，物・恩恵の授受方向の意味と視点が正しいものを正用とし、それ以外は誤用とする。また、誤用は、物・恩恵の授受の命題関係が間違ったものを意味論的誤り、命題関係は正しいが、視点制約を破ったものを語用論的誤り、両方が間違ったものを複合的誤りと分類した。

図 1　本研究の構成

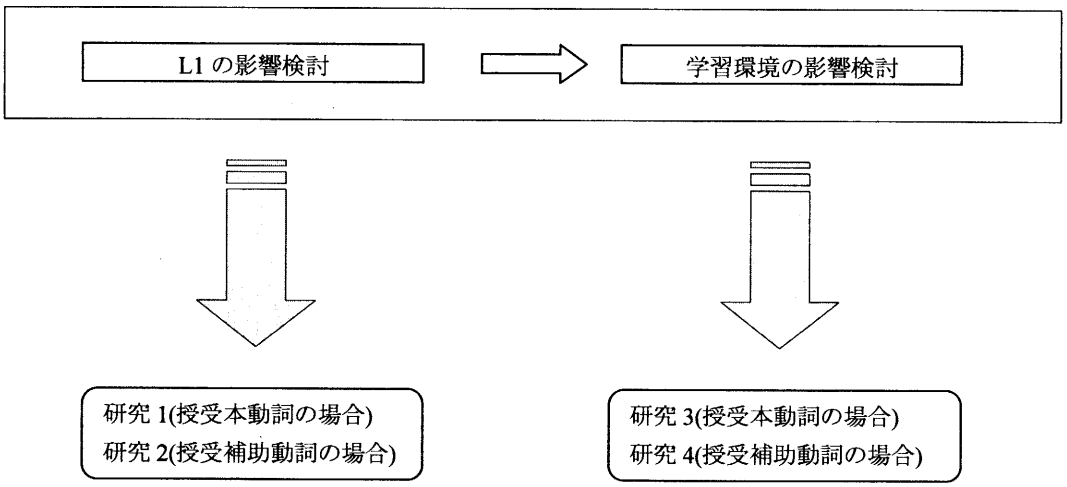

表2は、正用と誤用の分析の枠組を示したものである。

表2　正用と誤用の分析の枠組

	意味	視点	例文
正用	○	○	私が友達にプレゼントをあげる
意味論的誤り	×	○	私が友達にプレゼントをもらう
語用論的誤り	○	×	私が友達にプレゼントをくれる
複合的誤り	×	×	友達が私にプレゼントをあげる

尚、【研究1】～【研究4】の個々の研究課題の分析結果について、ポスター発表では述べたが、今回の発表要旨では省略する。

5. まとめ

本研究の分析結果については、今後詳しい考察が必要であるが、次のようなことが明らかになった。

まず、話者が受け手の場合において、日本語学習者の授受本動詞(くれる・もらう)と授受補助動詞(てくれる・てもらう)の習得順序は異なり、沼田(2001)の仮説は日本語学習者の授受動詞習得には当てはまらないといえる。また、その要因については、語彙レベルと統語レベルとの授受動詞文の内・外的主述関係のずれに起因すると考えられる。

次に、L1と学習環境の影響は、授受動詞の習得促進に影響する可能性が見られるものの、習得順序には影響しない。

最後に、日本語学習者の誤用には、授受方向の意味は正しいが、視点を間違っている表現が多く見られる。

今後は日本語学習者の発話データの場合を調査して、授受動詞の習得メカニズムの解明を目指していきたい。

参照文献

稲熊美保 (2004)「韓国人日本語学習者の授受表現の習得について－「もらう」系と「くれる」系を中心に」『国際開発研究フォーラム』26，名古屋大学大学院国際開発研究科 13-26.

上野田鶴子他(1978)「幼児期における授受構文の理解に関する実験的研究」昭和52年度科学研究費　言語情報と音声信号の相互交換に関する総合的研究　13-26.

大塚純子 (1995)「中上級日本語学習者の視点表現の発達について－立場志向文を中心に－」『言語文化と日本語教育』9, 281-292.

岡田久美 (1996)「授受構文習得における問題点について」『第7回第二言語習得研究会全国大会』京都外国語大学

岡田久美 (1997)「授受動詞の使用状況の分析－視点表現における問題点の考察－」『平成9年度日本語教育学会春季大会予稿集』81-86.

奥津敬一郎 (1984)「授受動詞文の構造—日本語・中国語対照研究」金田一春彦博士古稀記念論文集委員会編『金田一春彦博士古稀記念論文集第二巻　言語学編』三省堂

韓先照 (2003)「「あげる」「くれる」「もらう」の習得について－英語話者と中国語話者、韓国語話者を比較して－」『日本學報』57，韓国日本學會 303-319.

久野暲 (1978)『談話の文法』大修館

坂本正・岡田久美 (1996)「日本語の授受動詞の習得について」『アカデミア－文学・語学編－』61, 南山大学 157-202.

田中真理 (1997)「日本語学習者の視点・ヴォイスの習得－「受益文」と「視点の統一」を中心に－」『視点・ヴォイスに関する習得研究－学習環境と contextual variability を中心に－』平成8～9年度科学研究費補助金研究成果報告書(基盤研究(C)(2) 課題番号 08680323) 研究代表者 田中真理 21-52.

田中真理(1999)「Oral Proficiency　Interview における日本語ヴォイスの習得順序－文生成テストとの比較－」『視点・ヴォイスに関する習得研究－学習環境と contextual variability を中心に－』平成8～9年度科学研究費補助金研究成果報告書(基盤研究(C)(2) 課題番号 08680323) 研究代表者 田中真理 115-158.

沼田善子 (1999)「授受動詞文と対人認知」『日本語学』Vol.18, No.8, 46-54.

宮地裕 (1965)「やる・くれる・もらうを述語とする文の構造について」『国語学』63，21-33.

尹喜貞 (2004a)「授受本動詞「あげる」「くれる」「もらう」の習得－日本語を外国語とする韓国人日本語学習者を対象として－」『言語文化と日本語教育』28, 44-50.

尹喜貞 (2004b)「第2言語としての日本語の授受動詞習得研究概観」『第二言語習得・教育の研究最前線－2004年版』日本言語文化学研究会 168-181.

ゆん　ひじょん／お茶の水女子大学大学院　応用日本言語論講座

heejungyun@yahoo.co.jp